

はじめに

4

娘よ、息子よ。

これはあなたたちへの手紙であり、遺言です。

書いているおかあさんは、いま四十歳。娘よ、あなたはおしゃまな六歳。息子よ、あなたははじけんばかりの三歳。おかあさんはいま、おそらく人生で一番しあわせな日々を送っていると思う。あなたたちが一番かわいいとき。このまま永遠に時間を閉じ込めてしまいたくなるような魔法のとき。

おかあさんはいたって健康で、当分死ぬ予定はないのだけれど、こればかりはわからない。いのちは始まりも終わりも、神さまが決めるものだから。できれば長生きしたいと思う一方で、おかあさんはいつ死んでもいいように生きたいと思っている。悔いのない人生を送りたい。だから、あなたたちが一生を生き抜くのに必要な愛情をたっぷり注ぐと、日々励んでいるのよ。なかなかうまくいかないけどね。

遺言はふつう、人が死んでから読むもの。でもこの本は、私が生きていても、気が

向いたらでいいから読んでほしい。親子って、肝心なことを伝えあわないまますれちがうと思うの。おかあさんも、本当はおばあちゃんに「大好き」「愛してる」って言うことがなかったり、抱きついたりしたいけれど、いまさらでれくさくて、できないんだ。あなたたちも大きくなるにつれて、おかあさんに対していろいろな感情がわいてくることでしょう。おかあさんだって、あなたたちをただかわいいと思える時期だけではないはず。

でもね、いのちあることばと美しい思い出がいくつかあれば、人は生きていけると思うの。人生には失敗や挫折がつきものだし、どうにも抗^{あが}えない不幸がおそいかかってくることもあるかもしれない。自分をきらいになることだってあるかもしれない。大きくなってそんなときが訪れたら、この本を思い出してめくってほしい。

どうしてまだ字も読めないあなたたちに向かって、これを書くのかって？ それは、あなたたちへの愛情があふれているいまのうちに書いておかないと、忘れてしまいうだから。そしてだれよりも、いまを生きる私自身のために、書かずにはいられないから。

5